

---

2019 年

# 6 月の普及活動状況

---

## ダイジェスト版

～県下 10 農林事務所農業普及課と農業経営課(農業革新支援センター)の取組～



岐阜県農政部農業経営課

### 新たなブランドづくり

#### 可茂農林■大豆（白川町） 大豆播種作業終了、奨励品種決定現地調査の実施

白川町では、町内6集落営農組合が大豆生産に取り組み、地元の豆腐加工グループに大豆を供給している。

5月25日から開始した播種作業は梅雨入り前にほぼ終了し、本年度の作付面積は昨年同様で約25haとなった。

農業普及課では、大豆新品種「里のほほえみ」の岐阜県奨励品種登録検討のための現地調査を実施している。「里のほほえみ」は昨年も現地調査をしており、収量が高かったことから期待されている品種である。今後、地域適応性や品種特性について把握することとしている。

6月中旬には出芽が揃い、一部のほ場でシカやサル等の食害が見られるものの、順調に生育している。昨年、一昨年と収量減が続いているため、収量アップを図り、実需者へ安定供給ができるよう関係機関と連携して技術支援をしていく。



【大豆播種作業】

### 多様な担い手づくり

#### 岐阜農林■スマート農業 GPS機能付き直進キープ田植機、大活躍

（農）単南営農組合では、国のスマート農業加速化実証プロジェクトにて、県やJAぎふ、農機メーカーとともにスマート農業技術の稲作を中心とした実証に取り組んでいる。

6月には、直進キープ田植機の実証を始めたが、この田植機は、GPS機能により機械自ら直線と速度を保つもので、作業者は水田の端に到着したら、回転作業だけ行えばよい。

そのため、機械に不慣れな作業員でも熟練農業者と同じ植え付けができ、疲労度も従来機に比べて軽減される。

6月25日にはTV取材もあり、実演もかねて田植え作業を行ったが、その正確な作業に集まった関係者も感心していた。

農業普及課では、スマート農業の一連の技術実証に際して、データ収集・分析を営農組合と連携して取り組んでいる。



【手を放しても直進走行】

#### 西濃農林■トマト 県就農支援センター5期生の新たな門出

県就農支援センター第5期生の修了式が6月6日に開催された。

修了式では、約14か月に及ぶ講座を修了した研修生4名に修了証書と記念品が授与された。その後、岐阜県農政部次長から「支援センターでの経験や知識を実践に移して今後がんばってください」と激励の言葉が贈られた。

研修生は「自分が作ったトマトが売れる喜びが励みになる。これからも努力していきたい」と目を輝かせて抱負を語っていた。

また、6月8日には研修報告会があり、研修で学んだことや今後の営農計画などが発表された。50代の研修生からは、栽培面の振り返りにとどまらず、民間での経験を活かし、固定概念を捨て新たな市場を創造する提案や、トマトの作業環境の改善として、収穫コンテナの搬送時におけるコンベアー利用等の提案がなされ、大変興味深い内容であった。また、多くの失敗が経験できたことを、今後の営農に活かしたいと抱負を語った。

農業普及課は、新規栽培者となる修了生に対し、重点的な支援を行っていく。



【修了式後の記念撮影】

## 中濃農林■新規就農支援 **新規就農研修生集合研修の開講**

J Aめぐみでは、管内の新規就農5年以内の経験の浅い農業者と夏秋なす、さといもなどの新規就農を目指す方などを対象に平成28年から集合研修を開催している。この研修は、年間15回の講座からなり、「土壌・肥料」、「病害虫対策」などの他、農業経営のソフト面など幅広い内容を含んでいる。

今年で4回目となる集合研修の開講式が6月21日に行われ、22人が受講した。開講式に続いて行われた第1回の研修会は、ハウス施設の構造について、座学と現地のハウスにて学んだ。

この研修については、中濃農林事務所農業普及課の他、郡上、可茂の各農林事務所農業普及課も分担して講義を受け持ち、運営支援を行っている。



【集合研修の様子】

## 東濃農林■直売野菜 **アブラナ科野菜根こぶ病対策の研修会を開催**

6月10日に、きなあた瑞浪出荷者協議会のアブラナ科野菜根こぶ病対策研修会が瑞浪市日吉町で開催され、協議会員6名が参加した。安定出荷を阻害している根こぶ病の対策として、同協議会で土壌の病原菌密度を減らすためのおとり大根と薬剤を組み合わせた実証ほを設置している。今回は、4月下旬に播種したおとり大根の鋤き込みと石灰窒素の土壌混和の実演を参加者に見学してもらうとともに、農業普及課から一連の対策について説明した。

鋤き込みから1か月後以降に、コマツナやハクサイなどの播種や定植を行う予定で、農業普及課では、根こぶ病の発生程度やその後の生育状況について調査・検証を行い、技術の普及を目指す。



【おとり大根と、その鋤き込みの実証】

## 恵那農林■クリ **第1回クリ新規栽培チャレンジ塾を開催！**

6月2日(日)に第1回クリ新規栽培チャレンジ塾を中山間農業研究所中津川支所で開催した。

本塾は、クリの新規栽培を考えている方々や、就農して経験の浅い生産者へ実践的な技術指導を行うとともに、先輩農家と新規栽培者間の交流による仲間作りを支援している。

第1回チャレンジ塾には27名の方が参加し、クリ生産概要や年間の作業、病害虫防除等について講習を行った。塾生からは講習内容に対して活発に質問が出るなど生産意欲の高さを垣間見ることができた。また、塾生の1/3は初めて参加する方であり、これからも東美濃クリ産地が拡大することに期待が持てた。

農業普及課では、塾生の栽培意欲を喚起し、東美濃クリ産地がさらに拡大するよう支援を行っている。



【ほ場での講習の様子】

## 下呂農林■青年農業士活動 **J Aひだ青年部とともに交流会を開催**

6月21日、J Aひだ益田営農センターにおいて、下呂地区青年農業士会、J Aひだ青年部益田地区の共催による「GNG（下呂市農業がんぼろう）会」が開催された。

この会は、下呂市農業の発展に向け、下呂地区の若手農業者が発起人となり、今年で4回目の開催となり、農業者をはじめ下呂市、J Aひだ等関係機関、約70名が参加した。

今回は、この機会を活用して、本年度新たに就農した農業者6名に対して、農林事務所長から「清流の国ぎふ農業担い手証書」の授与も



【担い手証書の授与】



行われ、新規就農者は決意を新たにしていた。

その後の交流会では、下呂地区の指導農業士、長期研修生、関係機関のほか、JA青年部関係者も市外から出席し、地域の農業や自らの経営等について熱心に語り合った。

農業普及課では、今後も若手農業者の意見も積極的に聞き取り、普及活動を継続する。

### 飛騨農林■新規就農者 **新規就農者激励会を開催**

6月20日（木）、高山市において指導農業士会、青年農業士会、飛騨農林事務所主催で「新規就農者激励会」を開催した。高山市・飛騨市・農業大学校・飛騨高山高校、農協等関係機関からも多数の出席があり総勢61名と盛大な激励会となった。

当日は激励対象者34名の新規就農者のうち19名が出席し、「沢山儲けて、高級車に乗りたい。」「安定した収量を採り、品質の高い作物を育てたい。」「将来は規模拡大し、納得のできるトマトを作りたい。」など、意欲的な意見がたくさん出された。

農業普及課では、開催までの企画・調整及び当日の運営支援を行い、今後も経営を安定させ営農定着できるよう支援していく。



【参加者全員でパチリ】

### 革新支援センター■普及指導員 **スマート農業専門員養成研修（土地利用型）を実施**

6月14日、土地利用型経営体を支援する農業普及課職員5名を対象としたスマート農業専門員養成研修を実施した。この研修は、講義や現地視察を通じてスマート農業技術の知識習得を図るもので、今年度4回にわたり実施することとしている。

第1回目の研修では、農業技術センターが導入している直線キープ機能付田植機による移植作業の視察、および（株）東海近畿クボタより講師を招き、GNSSの基礎知識、KSASを基軸としたスマート農業の取組み等についての講義を実施した。

第2回目以降は、各農機メーカー等のスマート農業への取組みや、県が取り組んでいる「スマート農業技術の開発・実証プロジェクト」を通じた、スマート農機を活用した作業体系などについての研修を実施する計画である。



【講義の様子】

### 揖斐農林■茶 **「令和元年度 岐阜県茶品評会」審査結果**

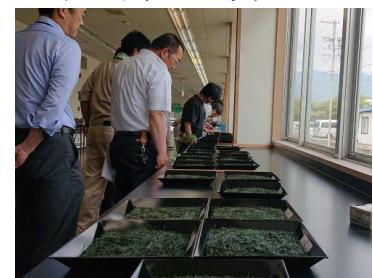
6月17日、揖斐川町上南方 美濃茶流通センターにおいて、岐阜県園芸特産振興会主催、岐阜

#### 売れるブランドづくり

県茶品評会審査会が行われ、管内（農）桂茶生産組合 長柄澄男氏が1等1席、太田英一氏が1等3席、美濃西部製茶組合が1等6席を獲得した。

出品点数は48点。本年は、平年並みの出芽で気温が低く推移したため品質の高い茶が出揃い、特に香気は秀品が多かった。特別賞受賞者は秋に開催される振興会主催の研修会において表彰を受けることとなっており、上位14点は関西茶品評会に出品される。

農業普及課では、審査概評、官能評価を現地につなぎながら、栽培技術・加工技術向上に向けた支援を行う。



## 郡上農林■夏秋トマト 地域別研修会を開催

郡上園芸特産振興会夏秋トマト部会では6月20日から24日に地域別研修会を開催し、部会員の栽培技術の向上に努めた。郡上市は高鷲、石徹白といった高標高地域から八幡、和良のような低標高地域にかけてトマトが栽培されているため、管内を6地域に区分し、地域の状況に合わせた現地研修会を毎月実施している。

今回の研修は梅雨時期から梅雨明けまでの草勢維持を図るため、急激な天候の変化に合わせた対策や少量多かん水、通路かん水の積極的な利用によりトマトの生育を促すことを農業普及課より説明した。

近年は気象災害等により収量が低下傾向であるが、若手生産者も増えてきていることから、栽培技術の徹底により収量の向上を図っていく。



【意見交換をする部会員】